

日本における夢研究の発展と推移

—時代と研究領域—

名島潤慈

(山口学芸大学大学院教育学研究科)

問題

夢告は鎌倉時代までであるが、吉凶判断・未来予知の夢占いは、古代から現代まで続いている。特に江戸時代には数多くの夢占い書が作られた。もっとも江戸時代には、夢となるのは①昼の思い②夜の思い③昼の思いの滞るものという三つに分けた荻生徂徠(1737年の『論語徴』)や、「すべて夢は我心より生じ、我病より生ず、外より来るにあらず」「夢を信じて心を惑はすは愚の至りなり、何ぞ夢に吉凶あらん」と述べた児島正長(1710年の『天地或問珍』)がいた。ともあれ、夢が人間科学の対象となるのは明治時代以降である。本発表では明治から現在まで日本の夢研究がどう進展してきたかを検討したい。

方法

夢に関する博士論文36本、単行本96冊、研究論文等1,316本をもとに検討する。原則として題目のなかに「夢」(夜見る夢)があるものに限定し、白昼夢・覚醒夢は除外した。時代区分は、明治(1868-1912)、大正(1912-1926)、昭和前半(1926-1957)、昭和後半(1958-1989)、平成(1989-2015)とする。

結果と考察

1. **全体的傾向**:各時代の執筆・出版数は博士論文・単行本・研究論文の順に、明治0・1・21、大正0・4・30、昭和前半1・5・35、昭和後半13・30・500、平成22・56・730である。共通して、昭和後半から数が大変多くなっている。

2. **精神生理学的研究**:博士論文では1960年代後半から開始されたレム期覚醒法による夢の精神生理学的研究が昭和後半に計7本(1970-1981年)書かれたが(研究論文は計15本)、その後途切れる。ただ平成にはfMRIを用いた「視覚的夢内容の神経デコーディング」(堀川, 2013)(睡眠中の脳活動からの夢内容の読み取り)がある(研究論文は2)。

3. **心理臨床学的研究**:(1)心理テストと夢、(2)夢の調査、(3)治療的利用、(4)特定のテーマの治療的視点からの分析、(5)その他に分けられる。これらのうち(3)では①精神分析的②分析心理学的③現象学的・現存在分析的④来談者中心療法的⑤フォーカシング的⑥ゲシュタルト療法的⑦認知行動療法的接近⑧その他(能動的夢分析、夢への内在的アプローチ、多元的夢分析、

夢PCAGIP等)に分けられ、(4)では転移夢や逆転移夢、心的機能水準と夢、夢のなかの死、コンプレックスの人格化、面接過程と夢等がある。時期的には昭和後半からで、博士論文7本、単行本38冊、研究論文401本と数多い(博士論文のみはすべて平成時代)。強制的に聴取される夢や一方的に調査される夢と異なり、面接場面でクライアントから報告され吟味される夢はセラピストクライアント関係のなかで新たに再生される夢とも言え、独特の意義を有している。

4. **人類学的研究**:アイヌ人の夢(吉田, 1912; 犬飼, 1957; 田中, 1993)、台湾のツォウ族(小川, 1982)、チベット民族(小田, 1995)、南インドのヴァギリ(神と交流する場としての夢)(岩谷, 2006, 2007, 2009, 2011)等、対象民族の数はまだ少ない。

5. **宗教学的研究**:計24名の宗教者の夢が吟味されているが、数的には華嚴宗の明恵35、浄土真宗の親鸞35、浄土宗の法然14本となっている。論文が書かれるのは基本的には昭和後半から。宗教者の夢は大変個人的で、多くの研究者が関心を寄せる。

6. **文学的研究**:夢十夜の研究論文数198、源氏物語33、日本霊異記15、日記文学としては更級日記30、蜻蛉日記13、とはずがたり10であり、夢十夜が圧倒的に多い(夢十夜の博士論文は0、単行本は4冊)。ただし夢十夜に関しては、各夢の持つ寓話性を考慮すると、夏目漱石が実際に見た夢に文学的な彫琢・加工・修正を施したものと考えられる。もっともこれは(源氏物語を除いて)他の文学作品(日記文学)にもあてはまり、個人がメモ用紙等書きつけた夢記(例えば明恵)を除いて、夢研究のむずかしさを示唆している。なお、時期的には昭和前半の研究も若干あるが、基本的には昭和後半からである。

以上を要約すると、夢研究は昭和時代の後半から数が増えていくが、これは夢研究の領域の拡大とも関連する。そして、領域のなかでも特に心理臨床学的研究は活発である。夢の単なる対象化に比べると、夢の治療的利用は不適応的パーソナリティの修正をもたらす方法なので、今後もより精緻化されていこう。なお、神経デコーディングは過去にない新しい接近法で、今後学問的な関心が高まっていこう。